

海外在住児童・生徒の状況と 同志社国際中高における帰国生徒教育

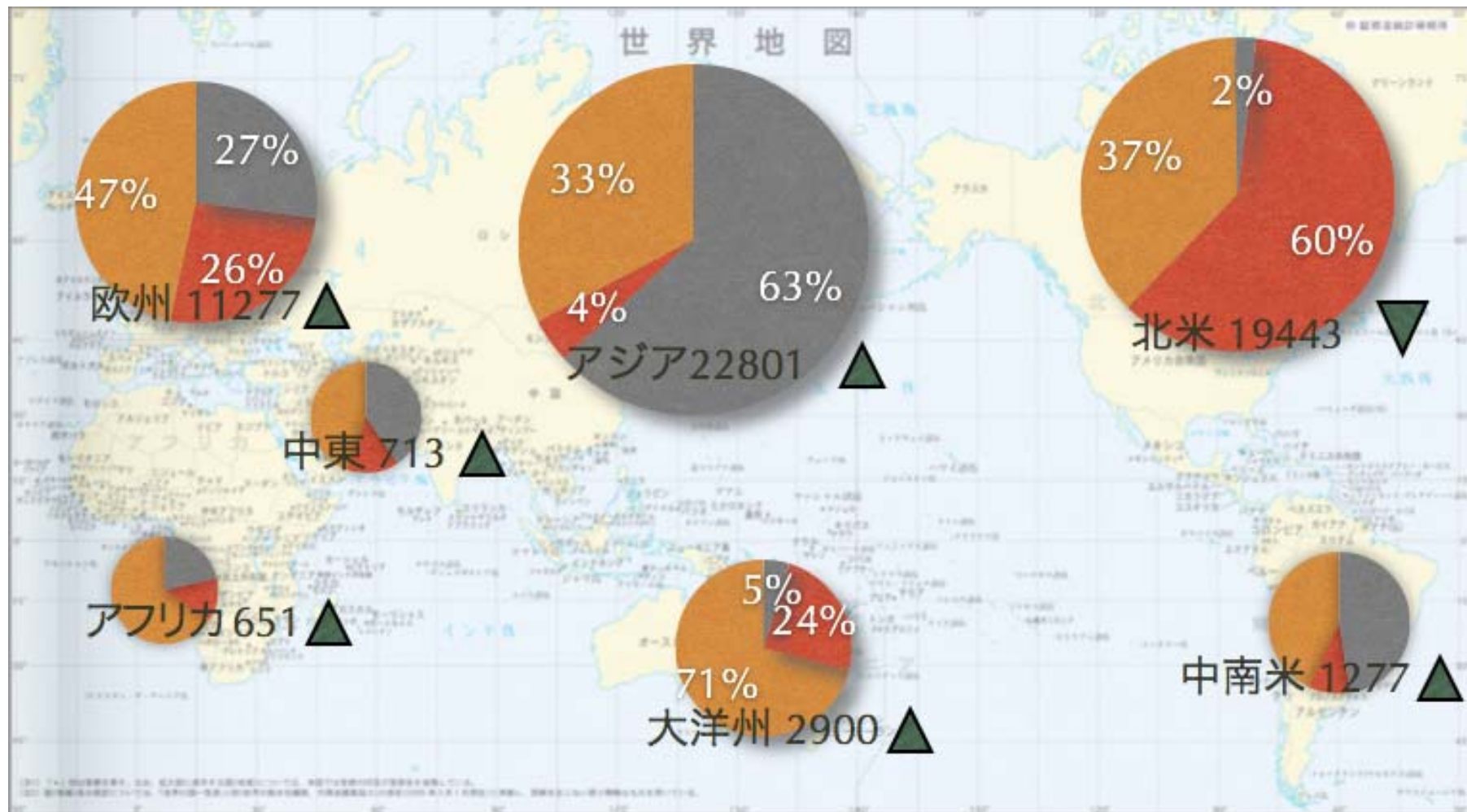
同志社国際中学校・高等学校

教頭 今井一宏

海外在住児童・生徒の状況

- 約59,100人(学齡期, 2007年4月15日現在, 外務省)
 - 現地校・インターナショナル校に在籍 40,200人
 - 日本人学校に在籍 18,900人地域的に見ると, アジアの日本人学校在籍者が増加傾向。
- **海外在住期間の長期化**(開校時3~4年, 現在6年半)
帯同児童・生徒の低年齢化(海外赴任者の低年齢化)
- **帰国児童・生徒数の状況**
全体数は1992年をピークに減少, ここ3~4年は横ばい。
 - 1992年度 約13,200人(小・中・高)
 - 2006年度 約10,300人(小・中・高)

海外在住児童・生徒の地域別就学状況



● 日本人学校在籍者 ● 補習校在籍者 ● 外国学校にのみ就学者

同志社国際中学校・高等学校の概要

➤ 1980年 高等学校開校

- 関西初の帰国生徒受け入れ専門校

A1群高校(帰国子女の受け入れを主たる目的として設置された学校)... 関東:2校, 中部:1校

関西:2校 = 同志社国際高等学校, 千里国際学園高等部

- 45人 × 6クラス × 3学年

➤ 1988年 中学校開校

- 30~40人 × 3クラス × 3学年

➤ 2/3の帰国生徒と1/3の国内一般生徒が共に学ぶ。

帰国生徒の特質(1)

- 優れた語学力
- 貴重な異文化体験
 - ・好奇心, 疑問をもつ力, 視野の広さ。
 - ・社会のことを考える契機がより大きい。
- 豊かな表現力
 - ・スピーチ・プレゼンテーション能力に富む。
 - ・発想・想像力に富み, レポート作成などの自由課題に強い。
- たくましさと幼さ
 - ・海外での適応, 帰国時の再適応に苦労。
 - ・日本人のほとんどいない現地校, インターナショナル校。
 - ・治安面などから親の過保護。
 - ・狭い日本人社会, 小規模の日本人学校。

帰国生徒の特質(2)

➤ 学習方法・授業形態の違い

- ・講義中心の日本式授業に対して違和感・不満をもつ。
- ・グループ学習, プレゼンテーション重視, 書かせる授業 (リサーチ, レポート課題)を意識的に展開。



➤ 帰国生徒教育＝適応教育＋特性伸長教育

1. 習熟度別授業

日本語力によるクラス分け(国語, 社会など) ... L, M

未履修分野によるクラス分け(数学など) ... L, M

語学力によるクラス分け(英語など) ... Sa, Sb, G

2. 日本語指導

同志社インターナショナル小学校(仮称)

- 2011年に開校(木津川市内)
- 一条校とインターナショナル校を併設
 - ・可能な限りの教育合同を目指す。
- 一条校では日英バイリンガル教育を実施
 - ・帰国児童, 国内一般児童, 外国人児童 60名 2クラス
 - ・同志社国際中学校を中心とした, 学内中学校との接続をはかる。
 - ・2年生以降でも, 編入生として帰国児童を受け入れる。
- インターナショナル校(1年生から12年生)
 - ・外国人児童・生徒を中心として30名 1クラス
 - ・国際バカロレア取得を目指す。

【以上, 現時点での予定】